



オープンワークスペース。列ごとに前傾姿勢、標準姿勢、後傾姿勢を促すテーブルとイスが並び、思考や作業に合わせて選択できる。視野角に10%以上の緑が入るように植栽計画がされている。太陽光に合わせて照明の明るさや色温度も変わっていく

DATA

設計：藤本社建築設計事務所 藤本社介 岩田正輝
 佐々木 慧 中川寛樹
 設計協力：監修 石川善樹 企画・設計 ジンズ 井上一鷹 萩原祐子 堀友和 設計 三井デザインテック 三浦圭太 榊 頼彦 照明計画 大光電機 住本 恭史 家具計画 コクヨ オカムラ プラス トレイン 音響計画 ビクターエンタテインメント JVCケンウッド・公共産業システム 植栽計画 パソナ・パナソニック ビジネスサービス アロマ アットアロマ
 施工：三井デザインテック 宗像康一 大内孝介 渡邊 亮
 工事種別：内装のみ 全面改装
 床面積：1390.37㎡
 工期：2017年10月14日～11月30日

施工協力：空調・電気・給排水衛生・厨房設備、照明器具、什器／三井デザインテック 音響設備／JVCケンウッド・公共産業システム USEN 家具／コクヨ オカムラ プラス トレイン サイン／パウハウス丸栄

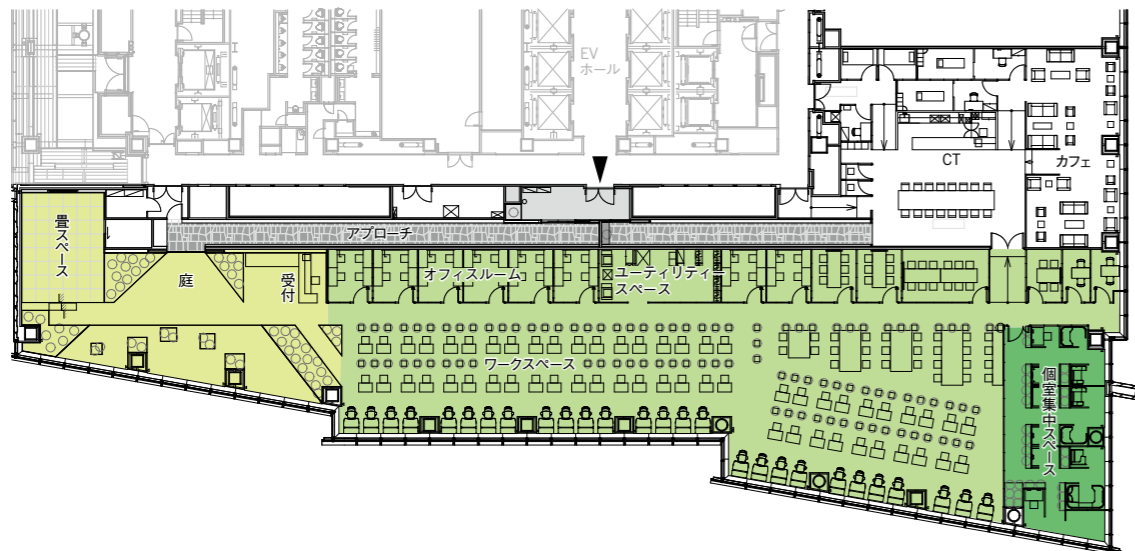
営業内容

所在地：東京都千代田区富士見2丁目10-2 飯田橋グラン・ブルーム29階
 開業：2017年12月1日
 電話：(03)5275-7017
 営業時間：平日／午前7時～午後11時 土・日曜日、祝日／午前9時～午後6時
 経営者：榊ジンズ 席数：162席
 主な利用料金(税別)：利用回数制限なし月額7万円

1500円/時間

主な仕上げ材料

床：OAフロア下地タイルカーペット貼り 一部花崗岩ランダム貼り 玉砂利敷き 一部畳敷き
 壁：LGS組みPB下地オーク材特注不燃木合板貼り 水性塗装 一部聚楽左官仕上げ 一部ホワイトボードシート貼り 一部カラーガラス張り パーティション/スチール
 天井：システム天井水性塗装
 家具：テーブル/脚・スチール角パイプ黒皮風塗装 天板・オーク無垢材 カウンター/木工下地オーク材突き板 染色CL 一部天板・メラミン化粧板貼り
 照明器具：LED調光調色システム
 植栽：シュロチク



PLAN 1:500

集中とコミュニケーションがワークスペースでのパフォーマンスを上げる

取材・文／梶原博子

集中を測り、仕事の質を向上させる

ジンズは、集中や落ち着きといった心身の状態が測れるメガネ型デバイス「JINS MEME(ジンズミーメ)」を展開する。商品の販売だけでなく、集中度合いの計測を通じて、仕事の質を可視化するサービスも提供している。それがシンク・ラボの構想に繋がると、井上さんは言う。

「個々が自分の集中時間や環境を分析することでパフォーマンスの指標が明らかになれば、これまで残業時間の削減だけが議論されていた働き方改革を、大きく前進させることができます。2017年に経済産業省主催の働き方改革コンテストでは『JINS MEME』のサービスで、グランプリを受賞しました。同時によく言われたのが『ジンズの社員はすごく集中して働いているのでは?』という言葉。そこで実測してみると、集中からは程遠い結果が出てしまいました。これをきっかけとして、科学的、医学的なエビデンスに基づいた集中するための空間という構想が生まれたのです」

石川さんの監修の下、集中状態へと導く6種類の介入方法を体系化し、それを空間に落とし込むことで、集中に特化したワークスペースづくりに乗り出したのである。

シンク・ラボは、複合ビル「飯田橋グラン・ブルーム」の29階にあり、30階にジンズ本社も入居する。エントランスから足を一歩踏み入ると、暗く長いアプローチ空間が続く。監修者の石川さんによれば、緊張とリラックスが共存した状態が集中しやすく、これらが良いバランスで共存するのが神社仏閣なのだ。これを受けて、藤本さんは参道をイメージした長いアプローチをつくり、暗闇空間に一筋の光を通すことで適度な緊張感を与えた。ワークスペースに入ると、一気に視界が開けて地上29階から見下ろす大パノラマが広がる。フロア内にはシュロチクのプランターが至る所に配置され、どこにいても緑が視界に入る。暗闇から光と緑に包まれたワークスペースに移動することで、緊張から解放されたリラックス状態となり、集中に向けて脳の準備が整

う構造になっている。

集中状態へと導くコンテンツ

「イノベーションに必要なのは、集中とコミュニケーションを行き来することであり、それを空間に取り込んでいます」(井上さん)

オープンなワークスペースには、思考によって使い分けられるように、3種類の姿勢をベースとしたデスクとチェアが用意されている。

「前かがみになると収束思考でロジカルになるため、前傾姿勢になるデスクとチェアを後方に配置。自然光が入る窓際には、上向き姿勢によって発散思考でアイデアや企画が生まれるとされるため、低座・後傾というワーキングポジションが取れる家具を用意しています」と井上さん。更に、全ての席が窓側を向くように家具を配置することで、より個々が集中しやすい状況をつくり出している。

シンク・ラボは、五感に対してインプットし、集中状態へと導く工夫が随所に施されている。とりわけ現代人の場合は、視覚、聴覚を刺激することが集中状態へ高く寄与するという。リラックス状態に導くために、緑が視野角に10%以上入ってくるように計画し、太陽光に合わせて照明の照度と色温度を変えて身体的ストレスを軽減。聴覚に関してはビクターのハイレゾ音源「クーネ」を採用し、可聴域の音

だけでなく高周波帯域まで再現した音源でリラックスを促す。また、周囲の音を気にせず集中しやすい環境づくりを意図した。ここでは18社のメーカーがパートナー企業として参画し、オフィス家具や音響、照明、食品など集中力を高める効果が期待される製品が導入されているのも大きな特徴だ。

オフィスはコミュニケーションの先へ

「利用者は近隣のワーカー、特に企画系の職種の方が多いという印象です」(井上さん)。18年2月から1時間1500円の利用チケットを導入し、新たな利用者も増えたようだ。過去10年を振り返ると、日本のオフィスにおける課題は、コミュニケーションの活性化だった。フリーアドレス制を導入したり、さまざまな形態のミーティングエリアを拡充するなど、コミュニケーションを促し、新しいアイデアやイノベーションが生まれる場づくりを積極的に取り入れる企業が相次いだ。一方、コミュニケーションの交差点が増えたことで、集中できる時間と機会が失われたとも言える。シンク・ラボでの成果がデータとして明らかになれば、今後さまざまなオフィスで「集中ルーム」を導入する動きも出てくるだろう。コミュニケーションと集中を共存させることが、これからのオフィスデザインのキーワードになりそうだ。(了)

空間コンセプト図

鳥居をくぐり、暗い参道を通り、開けた場所である手水を経て、拝礼、本殿へ向かう神社仏閣の空間構造を基に、集中状態に入るための空間が設計された。

